研究動態

日本における近代中国女性史研究について——2000～2005年を中心に*——

須藤瑞代**

序　論

近年、日本では中国女性史の一般向け書物が相次いで二冊刊行された。中国女性史研究会の『中国女性の一〇〇年 —— 史料にみる歩み』[1] と、関西中国女性史研究会の『中国女性史入門 —— 女たちの今と昔』[2] である。前者は、近現代 100 年間の中国女性史をほぼ時系列的に約 50 の項目に分け、それぞれに資料 (日本語訳) と解説をつけた概説書で、大学の教材となるよう工夫を凝らしている。実際、いくつかの大学で講義のテキストとして使用されている。後者は古代から

* 本稿の執筆に際しては、前山加奈子、石川照子、姚毅各氏のご教示をいただいた。謹んで謝意を表したい。

** 日本学術振興会特別研究員

1 中国女性史研究会編『中国女性の一〇〇年 —— 史料にみる歩み』青木書店、2004 年。

2 関西中国女性史研究会編『中国女性史入門 —— 女たちの今と昔』人文書院、2005 年。

©中央研究院近代史研究所

現代までの中国女性史を、「婚姻・生育」や「教育」といったトピックごとに整理した、分かりやすい入門書である。

この二書の刊行の背景には、日本における中国女性史研究がこれまで地道に重ねてきた研究成果がある。そこで本稿では、近年の日本における近代中国女性史研究動向を検討する。1975 年～2001 年までの動向については、すでに拙稿[3] で概観しているため、本稿では 2000 年から 2005 年前半を中心として、その傾向を述べたい。また、この約 6 年間は、近代中国女性に関する研究が集中して発表された時期でもある。上記の 2 冊を含めても 10 冊を超える書物が文字通り続々と刊行された。[4] このような状況は、これまでの日本の近代中国女性史研究史を振り返っても際立っている。この時期を取り上げて詳しく紹介する価値はあると思われる。

はじめに断っておかなくてはならないのは、対象となる研究の範囲である。先に「近年の日本における近代中国女性史研究について」

---

3 須藤瑞代「日本における中国女性史研究動向」〔韓国〕中国史学会『中国史研究』第 18 輯、2002 年 5 月。また、1993 年以前のものについては、石川照子「日本における近現代中国女性史研究の状況」(『近代中国婦女史研究』第 1 期、1993 年)にもまとめられている。さらに、前山加奈子による「近 10 年間の中国女性史研究 —— 主として日本における動向と展望 ——」が『近きに在りて』第 48 号(2005 年末出版予定)に掲載される。あわせてこちらも参照されたい。

4 たとえば、周一川『中国人女性の日本留学史研究』(国書刊行会、2000 年)、白水紀子『中国女性の 20 世紀 —— 近現代家父長制研究』(明石書店、2001 年)、洪郁如『近代台湾女性史　日本の植民統治と「新女性」の誕生』(勁草書房、2001 年)、坂元ひろ子『中国民族主義の神話 —— 人種・身体・ジェンダー』(岩波書店、2004 年)、秋山洋子『私と中国とフェミニズム』(インパクト出版会、2004 年)、関西中国女性史研究会編『ジェンダーからみた中国の家と女』(東方書店、2004 年)、謝黎『チャイナドレスをまとう女性たち』(青弓社、2004 年)、村田雄二郎編『「婦女雑誌」からみる近代中国女性』(研文出版、2005 年)、何燕侠『現代中国の法とジェンダー —— 女性の特別保護を問う』(尚学社、2005 年) などである。これ以外にも翻訳書として、李小江著・秋山洋子訳『女に向って 中国女性学をひらく』(インパクト出版会、2000 年)、タニ・E. バーロウ『国際フェミニズムと中国』(御茶の水書房、2003 年)、ドロシー・コウ著・小野和子訳・解説『纏足の靴 —— 小さな足の文化史』(平凡社、2005 年) も出版された。

取り上げると述べたが、「日本における」の定義は意外に難しい。たとえば、村田雄二郎編『「婦女雑誌」からみる近代中国女性』[5] は、『婦女雑誌』について 14 人の研究者が多様な角度から分析を行った論文集だが、日本人はそのうち 4 人に過ぎない。共同研究の成果は、日本語論文集のみならず台湾でも発表されており、[6] さらにもう一つの成果である目録データベースは、近代史研究所のサイトで公開された。[7] このような国際的研究はどのように扱えば良いのだろうか。

そこで本稿では、「日本語」で発表されたものはすべて「日本における」成果と考えることとした。本来ならば、日本人研究者が海外で中国語・英語などにより発表した論文も収集すべきであったのだが、それは含まず、読者の便宜を考えて海外から比較的アクセスしにくいと考えられる日本の出版物に掲載されたものに限定することとした。この点をまずご了承いただきたい。

また、「近代中国女性史」研究と言う場合、厳密な意味での歴史研究のみではなく、広い意味で近代中国女性を研究するものを含めた。実際、歴史・文学・法律といったさまざまな角度から研究が行われており、その傾向を一概にまとめることは困難である。そのため、やや恣意的になるかもしれないが、論点を明確にするために、以下の三つにまとめて分析する。(1) 国家と女性、(2) 日本と中国女性、(3)「家」と女性、である。その上で、日本における近代中国女性史研究全般に関する問題点を考察し、今後の展望につなげたい。

一、国家と女性

第一に、国家と女性の関連を分析する研究である。管見の限りで

5　村田雄二郎編前掲書。

6　『近代中国婦女史研究』第 12 期、2005 年 2 月。

7　『婦女雑誌』目録データベース (http://archwebs.mh.sinica.edu.tw/fnzz/) は、キーワードによる検索も可能である。

は、この問題に関連する研究が近年最も多いと思われる。従来、とりわけ中国での研究では、近代中国女性史は解放闘争史的に構築されてきた。それに対して、前山加奈子は、それをジェンダー的視点から再検討する試みを行った。[8] 資料の中から「できるかぎり女性の言説を取り上げ」[9]、清末から 1920 年代初めにかけての女性の言説を追った。それによって、中国女性の国家への関わり方には二種類あり、一つは良妻賢母など女性性・母性性に基づく革命・国家への貢献、もう一つは参政権獲得運動などに見られる主体的な (言い換えれば男性的役割を担おうとする) 国家との関わりを目指す行動があったことが示された。[10]

女性の言説を取り上げるという同様の姿勢は、他の論者にも共通して見られる。たとえば、白水紀子も、中国女性が家庭と社会の二重の役割を担うことになった点に着目し、近代化、国民化の問題を論じている。[11] また、江上幸子は、丁玲の『夜』を題材として、主人公である農村家庭の妻の不幸を、その背景としての女性運動に関する議論を再検証しながら考察した。[12] 李宣妮も丁玲の初期作品を分析し、中国の女性たちは「国民国家」成立の中で、「参加型」且つ「国民化」

---

8 前山加奈子「近代中国女性と国家とのかかわり」井桁碧編著『「日本」国家と女』青弓社、2000 年。また、前山加奈子「革命とジェンダー —— 中国女性史の再構築に向けて ——」『ジェンダー史学』創刊号、2005 年。

9 同上、134 ページ。

10 前山はもう一つ、近代以降においては半植民地国家において、女性性を持つために受ける心理的屈辱や身体的凌辱があり、これは「積極的な国家とのかかわりではなく、受動的かつ強要されたかかわりである」と指摘した上で、別稿に譲るとしている。同上、134 ページ。この点は、本稿で取り上げる「日本のナショナリズムと中国女性」のテーマに関連する問題である。

11 白水紀子「中国における『近代家族』の形成 —— 女性の国民化と二重役割の歴史 ——」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ (人文科学)』第 6 号、2004 年。

12 江上幸子「毛沢東の「新中国」における「人民・家庭・女性」—— 丁玲の『夜』再読 ——」フェリス女学院大学編『ペンをとる女性たち』翰林書房、2003 年。なお、同書には石島紀之「近代中国における女性の社会進出」も収録されており、参考になる。

の道（つまり前山の言う男性的・主体的参加）を選ばなければならなかったと指摘している。[13] それゆえに中国のフェミニズムの発展を阻害する形になったとも言えよう。その後の中国フェミニズムの発展については、秋山洋子が李小江の個人史などを踏まえながら、80 年代以降の中国女性学の形成の中で論じている。[14]

以上の論者が、女性の言説分析に特化しているのに対し、坂元ひろ子は女性のみならず男性知識人の言説をも取り上げている。[15]『中国民族主義の神話 ―― 人種・身体・ジェンダー』は、近代における「国民」の創出過程に、ジェンダーという軸を入れるという視座の新しさで注目を集めた著作である。近代中国の人種観にまつわる言説を分析し、中国民族主義は、中国が受容した社会進化論に大きく規定されていることを明らかにした。さらに、近代の諸問題のほとんどがからむものとして、纏足をめぐるディスコースを分析し、女性美の象徴から国恥へと価値観が転変したことを複数の角度から論じている。ここで取り上げられた優生学の問題も、女性の個としての自由と民族改良がせめぎ合う問題として重要である。この点は、姚毅も産児制限の角度から議論している。[16]

以上のように、女性の国民化には、前山らの指摘するように、男

---

13 李宣圻「近代中国における『女性主義』の成立とその展開」『中国研究月報』第 624 号、2000 年。

14 秋山洋子「中国女性学における思想形成」『女性学』第 8 号、2000 年。秋山は、ほかにも李小江の著作の翻訳や紹介を積極的に行っている。李小江著・秋山洋子訳『女に向って　中国女性学をひらく』インパクト出版会、2000 年。秋山洋子「戦争と暴力 中国女性学の創出 ―― 李小江はどこへ向かうのか」『現代思想』第 32 期第 7 号、2004 年。秋山洋子『私と中国とフェミニズム』インパクト出版会、2004 年。

15 坂元ひろ子『中国民族主義の神話 ―― 人種・身体・ジェンダー』岩波書店、2004 年。

16 姚毅「母性自決か、民族改良か ―― 1920 年代の中国における産児調節の言説を中心に ――」『中国女性史研究』第 11 号、2002 年。また、姚毅には、「『被害者』というレトリック ――『婦女雑誌』の娼婦像 ――」（村田雄二郎編前掲書）等もある。セクシュアリティの面から中国女性史研究を積極的に進めている。

性として/女性としてという二つのパターンに大別できるわけだが、そうした問題は、より大きな民族主義や進化論などの問題に大きく規定されていたことを坂元が指摘したと言えるだろう。

二、日本と中国女性

続いて、日本と中国女性の関連についてである。これには大きく分けて、①近代における相互交流と、②日中戦争時期 (慰安婦研究と植民地研究) の二つのテーマがある。

①近代における相互交流

まず、日本の良妻賢母思想と中国女性に関する研究がある。陳妍湲は服部宇之吉を中心に、良妻賢母思想の伝播と受容過程を解明した。[17] 杉本史子は、家事科教員曹敏の日本視察記録などを資料とし、家事科の中国への受容と、それが衰退していく様子を考察している。[18] また杉本は、家事科民初の女子家事科教育は日本の「良妻賢母」を取り入れたもので、教育の対象者が富裕階層の女子に限られるという限界があったことについても指摘している。[19] 日本への中国人女子留学生についての研究としては、周一川の著作があり、留学生が中国に帰国後、女子高等教育推進等に果たした役割を評価している。[20] また、須藤瑞代は『婦女雑誌』の日本女性観の変遷を追い、東アジアにおける「女」

---

17 陳妍湲「近代日中間における「賢母良妻」教育思想の伝播と受容 —— 服部宇之吉の中国女子教育活動およびその女性観を中心に」『中国女性史研究』第 12 号、2003 年。

18 杉本史子「中国近代における家事科教育 —— その導入と抵抗」関西中国女性史研究会編前掲『ジェンダーからみた中国の家と女』。

19 杉本史子「民国初期における女子家事科教育」『立命館言語文化研究』13-4 号 (2002 年)。同著者には、杉本史子「民国期の女子教育と家庭改革」『中国研究論叢』第 3 号 (2003 年) もある。

20 周一川『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会、2000 年。

意識の成立に西洋フェミニズムの影響があったことを論じた。[21]

石川照子は、中国ＹＷＣＡ（中華基督教女青年会）に関して独自の研究を積み重ねている。ＹＷＣＡは「国際主義を標榜し、女性を対象とする社会的組織化を目指して、キリスト教信仰にもとづく都市中間層女性たちが結集してできた社会団体」[22] である。ＹＷＣＡは世界各地に組織され、中国にも、日本にもＹＷＣＡがある。石川は、中国ＹＷＣＡの組織を解明し、[23] その日本観を考察している。[24] その一方で、日本ＹＷＣＡの側からも、日本の大陸政策の一環としての「文化政策」と、その重要な一翼を担った日本のキリスト教会の戦争への「動員」と「協力」を考察している。[25] キリスト教信仰に基づく組織であるＹＷＣＡを、中国女性・日本女性の双方から考察し、東アジアの女性史研究のみならず、西洋女性史・宗教史との関連をも射程に入る点で重要な研究である。

②日中戦争時期（「慰安婦」研究と植民地研究）

「慰安婦」研究は、日本のナショナリズム研究と中国女性史研究が最も先鋭な形で結び付けられるテーマであると言えるだろう。この

---

21 須藤瑞代「『婦女雑誌』と日本女性 ―― 近代東アジアにおける「同じ女」の意味とは ――」村田雄二郎編前掲書。

22 石川照子「近現代中国におけるジェンダーの展開 ―― ＹＷＣＡの活動と女性政策を事例として ――」『中央大学経済研究所年報』第 36 号、2005 年、218 ページ。

23 石川照子「上海のＹＷＣＡ ―― その組織と人のネットワーク ――」日本上海史研究会編『上海 ―― 重層するネットワーク』汲古書院、2000 年。また、石川照子「抗戦期におけるＹＷＣＡの活動と女性動員」中央大学人文科学研究所編『民国後期中国国民党政権の研究』中央大学出版部、2005 年。

24 石川照子「中国ＹＷＣＡ（女青年会）の日本観 ―― 雑誌『女青年』の日本関係記事の考察 ――」歴史学研究会編『性と権力関係の歴史』青木書店、2004 年。

25 石川照子「日本ＹＷＣＡの国際主義・ナショナリズム・ジェンダー ―― 加藤タカの経験と言説を手がかりとして」氏家幹人・桜井由幾・谷本雅之・長野ひろ子編『日本近代国家の成立とジェンダー』柏書房、2003 年。石川照子「日本の大陸政策と上海日本人ＹＷＣＡ ――「文化政策」への協力と「国際主義」」高綱博文編『戦時上海 ―― 1937～45 年』研文出版、2005 年。

テーマについては、中国女性史からの分析というよりは、日本軍による戦争責任問題の観点から、当時のアジア全域に及んだ女性たちの性暴力被害に関して考察を行うものが多い。旧日本軍による性暴力研究に取り組み続けている石田米子らは、近年中国側証言・史料を豊富に取り入れた大書を編集した。[26] 小浜正子は、このような石田らのグループによる研究について、その口述史料による研究としての意義を論じ、優れた論考を著した。[27]「慰安婦」研究は、中国女性史研究のみならず、日本女性史からも、また日本史・中国史、ひいてはアジア全体の歴史と政治を考える上での重要な問題となっていることが分かる。[28]

次に植民地に関する研究である。たとえば沈潔は、民族・階級・満洲日本人と内地日本人の区別によって分断され、重層化していた女性の生活について考察している。[29] 竹村民郎は、日本人社会の風紀の乱れ対策として、大連に公娼制度が導入されたこと、そしてそれが婦人救済運動を引き起こし、やがて日本国内へ波及していくことを分析している。[30]

また、東アジアの研究者による共同研究会として、2000 年 10 月から継続的に行われた東アジア近代女性史研究会では、植民地期の女性

---

26 石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力』創土社、2004 年。また、石田米子「中国における日本軍性暴力被害の調査・記録に取りくんで —— 被害女性たちの「出口気」(心にわだかまるものを吐き出す) の意味を考える」(『中国女性史研究』第 11 号、2002 年)、石田米子 (小浜正子解説)「中国農村における聞き取りから見えた戦時性暴力の構造」(『鳴門史学』第 18 集、2005 年) もある。

27 小浜正子「口述史料を利用した中国近現代史研究の可能性 —— 山西省盂県の日本軍性暴力研究をめぐって」『東洋史研究』第 64 巻第 2 号、2005 年 9 月。

28 「慰安婦」問題については、大学などでも授業で取り上げられることもある。その成果として活字になったものは少ないが、たとえば、フェリス女学院大学江上幸子ゼミ訳「ある慰安婦の証言:『華声月報』1999 年 8 月号より」(『中国女性史研究』第 10 号、2001 年) がある。また、雑誌においても、『戦争責任研究』第 27 号では「特集 中国上海・南京の日本軍慰安所」(2000 年) という特集号が組まれた。

29 沈潔「戦時期の満洲における女性生活の構図」『歴史評論』612 号、2001 年。

30 竹村民郎「公娼制度の定着と婦人救済運動」『環』第 10 号、2002 年 7 月。

史という視座から、女性にとっての国民国家形成とアイデンティティの形成の関連について議論が行われた。[31] さらに、『歴史評論』は「『帝国』・植民地の女性」という特集を組み、「帝国」・植民地の女性が、諸政策に対してどのように対応し、それによって生活に変化が生まれたのかを総合的に考察している。[32] さらにその一年後には「特集　東アジア女性の『帝国』観と植民地認識」という特集が組まれ、日本による東アジアの植民地支配と女性との関わりを歴史的に問い直す試みがなされた。[33]

台湾女性史研究もまた、日本という視座からすれば「植民地」女性史研究に含められるのであろうが、その位置づけは難しい。先述の満洲女性の研究と比較してみても、「満洲」はすでに消滅しているため「植民地」とくくることができるのに対して、台湾女性史は現在進行形の「台湾史」に接続されるからである。このような点を意識しつつ分析したものとして、游鑑明「受益者か、それとも被害者か―第２次世界大戦時期の台湾人女性 (1937～45 年)」がある。[34]

洪郁如は台湾史研究全般に関して、「支配される側の主体性に着目するアプローチが昨年の研究の一つの傾向」と指摘している。[35] すなわち、従来のように支配／被支配の構造にとらわれるのではなく、その中に見られる行爲者個人の目的や願望に着目する視点である。洪による近代台湾女性史の通史もまたそのような視座に立っている。[36] また、宮崎聖子による 1930 年前後の処女会の事例研究も、台湾人女性

31　早川紀代「植民地期女性史研究について」『歴史評論』612 号、2001 年 4 月。

32　『歴史評論』第 612 号、2001 年 4 月。

33　『歴史評論』第 624 号、2002 年 4 月。

34　游鑑明著・大澤肇訳「受益者か、それとも被害者か ―― 第 2 次世界大戦時期の台湾人女性 (1937～45 年)」早川紀代編『植民地と戦争責任 戦争・暴力と女性』吉川弘文館、2005 年。

35　洪郁如「2003 年の歴史学界 ―― 回顧と展望 ――：東アジア (中国―台湾)」『史学雑誌』第 113 編第 5 号、2004 年 5 月、257 ページ。

36　洪郁如『近代台湾女性史　日本の植民統治と「新女性」の誕生』勁草書房、2001 年。

が植民地主義に服従しているように見えながら、実際は読み書きや娯楽の機会を得るという自己の目的によって動いていたと捉えている。[37]

以上の研究に対しては、行爲者個人の目的や願望そのものが、支配者側のコントロールの枠内におさまるものに留まっていたのではないかという意見もあるかもしれない。しかし、その上でなお支配／被支配の構造を問い直す試みとして重要である。

三、「家」と中国女性

次に、「家」と中国女性についてである。関西女性史研究会は、まさしく『ジェンダーからみた中国の家と女』[38] というタイトルで論文集を刊行しており、以下に挙げる論文は本書に収録されたものを多く含む。中国女性と「家」を考えるパターンとしては、「夫 — 妻関係」「父 — 娘関係」「母 — 娘関係」、及び、「家」そのもののあり方を考察する、という四つがある。

まず、「夫 — 妻関係」については、それが良好であった場合とそうでなかった場合の両方の研究がある。竹内理樺は廖仲愷の未亡人何香凝を取り上げ、「夫」の政治活動を引き継ぐ形で行動してくプロセスを考察している。[39] 西川真子は、梁啓超の息子梁思成とその妻林徽因の夫婦関係について、「知」の共有という観点から考察している。[40] 同著者は、さらに、胡適とその妻江冬秀を取り上げ、二人の恋愛観・

---

37 宮崎聖子「植民地期台湾における女性のエイジェンシーに関する一考察」『ジェンダー研究』第 6 号、2003 年。

38 関西中国女性史研究会編前掲『ジェンダーからみた中国の家と女』。

39 竹内理樺「何香凝 —— 家と政治に生きた女性指導者」同上書。また、同著者の「中華民国期における政治指導者の妻の役割」(『文学・芸術・文化』第 15 期第 2 号、2004 年)では、中国の女性運動の指導者が政治指導者の妻でもある点に着目している。

40 西川真子「民国時期中国知識人夫婦における「知」の共有 —— 梁思成と林徽因 ——」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第 23 号、2002 年。

夫婦観の違いから来る煩悶を考察しているが、これは「知」の共有を成しえなかった夫婦関係の分析といえよう。[41] また、鮑家麟は、徐志摩の離婚の契機が、妻と徐志摩の父との間の性的関係の存在にあったのではないかと推測する。[42] 1920 年代の自由離婚については、許慧琦が『婦女雑誌』を資料として分析し、当時流行した自由離婚言説は男性たち自身の理想に過ぎなかったことを明らかにした。[43]

「父 ― 娘関係」については、中山文は、袁雪芬と上海の越劇を考察するなかで、袁の父との良好な関係を描き、また越劇そのものが共産党の「娘」的存在であったことを二重写しにして分析しており興味深い。[44] また須藤瑞代は、梁啓超とその長女梁思順との関係を考察し、その上で二人の女性論の相違について論じた。[45]

「母 ― 娘関係」については、白水紀子が 20 世紀の文学作品を資料とし、そこに見られる母・寡婦・妾の役割を再検討し、世代間支配と性支配の問題を考察した大著がある。[46] 家父長制の中での「母」の権力に焦点をあてつつ、たとえば黄廬隠の自伝などをとりあげ、「なぜ中国では母と娘の「対立」あるいは「服従」が描き続けられるのか」[47] といった問題にアプローチしている。白水はさらに、中国と日本の「新

41 西川真子「胡適と江冬秀 ―― 民国時期一知識人の家」関西中国女性史研究会編前掲『ジェンダーからみた中国の家と女』。

42 鮑家麟著・津守陽訳「徐志摩の結婚と離婚」同上書。

43 許慧琦著・陳姃湲訳「『婦女雑誌』からみる自由離婚の思想とその実践 ―― ジェンダー論の視点から」村田雄二郎編前掲書。

44 中山文「袁雪芬と上海の越劇 ―― 家と女をめぐって」関西中国女性史研究会編前掲『ジェンダーからみた中国の家と女』。

45 須藤瑞代「梁啓超と「宝貝」思順 ―― 父・娘と女性論 ――」『中国―社会と文化』第 20 号、2005 年 6 月。

46 白水紀子『中国女性の 20 世紀―近現代家父長制研究』明石書店、2001 年。また、文学からのアプローチとしては、研究書ではないが、丁玲・張愛玲など 16 人の女性作家による短編小説の翻訳集である、丸山昇監修・白水紀子主編『中国現代文学珠玉選 小説 3 女性作家選集』(二玄社、2001 年) が刊行されている。

47 白水紀子同上書、87 ページ。

しい家庭」を描いた小説の比較検討も行った。[48] 一方濱田麻矢は、「娘」の立場から、生家・婚家および結婚について分析している。[49]

「家」そのものについては、筧久美子は黄遵憲の女性家族に焦点を当て、[50] 成田靜香は実家に留まったり、女だけの共同体を作ったりしたケースを分析し、[51] 劉小俊は家庭を形成し得なかった保姆の、「家」に対する憧れとそれが手に入らない絶望を考察している。[52] また、1920 年代になると、家庭・職業・革命のいずれをどのように優先させるべきかという議論が、欧米の学説を受容する中で行われたが、この点については岩間一弘が考察している。[53]

以上のように「家」と女性の関わりを複数の角度から分析することで、単なる抑圧の装置としてではない「家」概念が浮き彫りになっていくように思われる。このような分析は、やや固定概念化してしまったような「家父長制」を問い直す研究へとつながるものであるだろう。

四、まとめと展望

以上、(1) 国家と女性、(2) 日本と中国女性、(3)「家」と女性という三つの角度から紹介してきた。以上に取り上げてきた研究は、「ジ

---

48 白水紀子「中国文学にみる「近代家族」批判 —日中女性文学を通して」『東洋文化研究所紀要』第 143 号、2003 年。白水はほかにも、中国のセクシュアル・マイノリティーを取り上げた珍しい論考「中国のセクシュアル・マイノリティー」(『東アジア比較文化研究』第 3 号、2004 年 9 月) などを発表している。

49 濱田麻矢「生家を出た娘たち —— 民国期の恋愛小説を読む」関西中国女性史研究会編前掲『ジェンダーからみた中国の家と女』。

50 筧久美子「清末の客家・五世同堂の女性たち」同上書。

51 成田靜香「自梳女の家 —— 広東の婚姻文化」同上書。

52 劉小俊「保姆たちの家への渇望 —— 王安憶『富萍』と『鳩雀一戦』について」同上書。

53 岩間一弘「家庭・職業・革命 —— 両大戦間の中国における都市中間層の女性をめぐって」村田雄二郎編前掲書。

ェンダー」をなんらかの形で分析に取り入れているものがほとんどである。

ジェンダー概念は、日本でも中国女性史研究のみならず、日本女性史なども含めた女性史研究一般に取り入れられている。 2004 年には、日本でジェンダー史学会が設立された。その設立趣意書は、ジェンダー概念を「学術研究の基軸的概念として、 21 世紀の新たな知のパラダイム構築にかかわろうとして」いるものと位置づけている。[54] ジェンダー史学会の設立は、日本においてジェンダー概念が学術用語として一般化した (もしくはしつつある) ことの一つの象徴であると言えるだろう。

近代中国女性史研究におけるジェンダー概念の取り入れ方は、テーマではなく研究者個人の女性史に対する姿勢によってまちまちであるように思われる。大きく分けると、まず男性と比較して女性の置かれた地位に注意を払いながら分析を行う、ジェンダー・コンシャスな姿勢がある。あるいは、スコットの言う「肉体的差異に意味を付与する知」[55] として「ジェンダー」をとらえ、いかなる権力構造によって「意味」が付与されたのかを考察しようとする姿勢がある。評者の印象では、前者が多いように思われる。

このような傾向の中で、逆にジェンダー概念を意識的に用いず(と評者には思われる)、実証的に分析を行って、完成度の高い議論をしているのは高嶋航である。高嶋は、「天足会と不纏足会」[56] で、「戊戌維新期の纏足解放運動を扱った研究は多いが、ほとんどがそれを女

---

54 ジェンダー史学会設立趣意書は、以下のページを参照。
http://www7a.biglobe.ne.jp/~genderhistory/shuisho.html

55 ジョーン・W・スコット著・荻野美穂訳『増補新版　ジェンダーと歴史学』平凡社、2004 年、24 ページ。

56 高嶋航「天足会と不纏足会」『東洋史研究』第 62 巻第 2 号、2003 年 9 月。高嶋には、「教会と信者の間で ―― 女性宣教師による纏足解放の試み」(森時彦編『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所、2004 年)、「近代中国における女性兵士の創出 ―― 武漢中央軍事政治学校女生隊」(『人文学報』90、2004 年 4 月) などの著作もある。

性解放運動とみなし、叙述は大同小異である」(P.90) と述べ、女性解放という側面からしか纏足解放が語られてこなかったことが問題であると指摘している。その上で、纏足そのものではなく、西洋人主導の「天足会」と中国知識人主導の「不纏足会」それぞれの成り立ちについて実証的に検証した。この二つの会は協力をなしえなかったが、それは「女性と言う政治的資源をめぐる争いだったともいえる」(P.116) とする。

高嶋は、「纏足」を「被抑圧」の証と無批判に捉えることが、一種のバイアスと化すおそれがあることに敏感である。それは、ジェンダー・コンシャスな研究、もしくはジェンダー概念登場以前からの女性史の流れにおける、一種自明とされてきた「被抑圧者」としての女性という前提への懐疑の表明でもあるだろう。

従来自明とされてきたものへの懐疑は、先に挙げたジェンダー意識に基づいた研究にも見られる。たとえば、前山加奈子は解放闘争史的に構築されてきた近代中国女性史の見直しをはかった。洪郁如は、台湾史研究における支配/被支配の構図への再検討の重要性を指摘した。また、「家」と女性に関する論者たちも単なる抑圧の装置としてではない「家」概念を指摘した。さらに、坂元ひろ子は、従来の女性史のようにジェンダーのみを重視するのではなく、民族主義や進化論という、西洋起原の思想的枠組みの中国における受容と変容を分析しながら「国民」の創出を論じた。この点は、「男/女の関係だけでなく中国/西洋という関係を考慮に入れないと、不纏足会の本質は見えてこない」(P.90) という高嶋の指摘と響きあうものとも言えるだろう。

この指摘は、中国女性史研究からジェンダー概念を問い直すことにつながるのではないだろうか。先述の通り、スコットはジェンダーを「肉体的差異に意味を付与する知」と定義した。そのときスコットが想定していたのは、その意味が親族関係・経済関係・(国内の) 政治関係といった権力構造によってもたらされることであった。ここには、中国/西洋、もしくは国際関係という視点は入っていないか、少なくと

もあまり重視されていない。もしも中国女性史研究において、中国／西洋という枠組みが中国のジェンダーに作用していると言えるのだとしたらどうだろうか。つまり、ジェンダーを一つの固定された視座とし、それを中国女性史研究にそのまま導入するのではなく、中国女性史研究からジェンダー概念そのものへの批判的検討につながる方向性が示されつつあるのではないだろうか。

以上、私見を述べてきたが、紙幅の関係で取り上げられなかった著作や、注でしか触れる事のできなかった著作も多々あった。お詫びを申し上げるとともに、ご批判を請いたい。